

Liesegang の組織学への貢献

中村 三雄

Raphael Eduard Liesegang (1869~1947) は著名なドイツの化学者でコロイド化学および写真化学の領域で数多くの優れた研究、就中リーゼガング輪の発見をなしている。

Liesegang はまた、医学特に組織学および生理学の分野でも大きな足跡を残している。組織学における彼の一連の研究は写真化学の理論を鍍銀染色の機構の解明に適用することを企図したもので、これらの研究において彼は、一、鍍銀反応は「Kern」（現像核）の形成とその周囲への中性銀の沈着の二段階からなること、二、組織のコロイド特性が染色に重要な役割を果たすこと、三、Lippmann-Cramer の考案になる物理現象液（銀イオンを含有する現象液）にアラビアゴム液を添加した溶液が鍍銀反応のための現象液として有用であること、の諸点を明らかにした。三に示した手技は後に Timm によって硫化水素前処理と組み合わせられ

て硫化銀法となり重金属の証明に利用されることとなる。
本講演において演者は以上の Liesegang の研究結果と彼の経歴を紹介する。

（大分医科大学解剖学教室）